

# 有 と 知 (承前)

山 田 次 郎

## 四 理解知の限界(……物と心……)

さて物的實在が以上の如く、理解知の量化の根本的意圖に沿ひ力學的に一應究極した等質態と見られたところのもはや色無く香無き單なる時空的規定の境地に於いて、遂にはその自然的な直觀性さへをも失はうとし、感覺的に性質的なる(觀測)體驗間の關係を規定する單なる數學的形式の形に、今や或意味に於いて全く觀念(内在)化し了らうとするともいふべきに至つて、茲に改めて問題となつてくることは外でもない、そのやうな物的實在と現實に豊富な性質の多様をもつ意識的體驗世界との關係果して如何といふことである。通常我々は外物の刺戟によつて感覺が成り立つといふ風に考へる。如上の意味に於いて一見もはや外的に超越的な實在性を喪失したとも見える物理學的實在は果していかなる意味に於いて能く所謂「刺戟」の源泉たり得るのであるか。

物理學的に究極し來つた理解知は一方上述の如く現實の歴史性に撞着すると共に、他方に於いては右の如くして結局所謂物と心との關係の問題にまで接觸して來なければならぬと考へられる。顧みれば、事象の因果的相應の含む異質的階層を合理化(自覺的に連續化)すべく抑、力學的に等質化した世界なるものは求められて來たのであつたが、

その事たる實は、そのやうな斷層性をば一先づ總べて物と心との間のそれに押し遣りつつ（即ち異質性を主觀的「現象」として等質的「實在」から區別しつつ）、最後にあらためてそこに最も根本的且代表的にそれを意識し直さんためであつたと云つてよいのである。

元來原始の事實としては、先づ感覺的と感情的、更に感覺的には視覺的聽覺的觸覺的等に大略種別される如き性質的內容の、時間的なる相關呼應の關係の存するばかりである。併し乍らそのやうな關聯には或秩序があり、反覆される關係の自己再認があつて、そこに空間的に外界的なる物が考へられ、變化の因果的相應と即するその實體的自己保持が意識せられる所に理解の一先づそこに安定する日常的な生の外界的環境が成り立つが、そのやうな自然的な因果的實體的系統には關係の恒常性の反面に抜き難い異質的斷層が含まれて居り、之をあくまで連續的に自覺しようとして、かの力學的世界なるものが所謂現象の背後なる實在たる意味に於いて考へられてきたのである——何故ならばそこには一方にあくまでも自己保持的と考へられる物の要素と他方にその單なる位置的變化（相異）としての運動があり、連續の意識としての自覺が即ち最も密接なる意味に於けるそれに外ならぬところの同一相異の相即がそこにはあるからである（それは又量の本質に外ならぬものであつて、量化的意圖が即ち合理化的意圖である所以がそこにあるのである）。かくて例へば光や音が夫々或等質的なる物理的存在の波動として、又熱の如きも所謂分子の運動として、感覺的に異質的なる直接現前の事態が説明せらるべく夫々の背後的實相といふべきものが考へられるに至る。——その次第はといへば要するにかうである。即ち、先づ事象の因果的相應に關する所謂定性的な認知が成り立たねばならぬのは勿論として、その上で更にその關係を量的に限定するに當り、諸種の感覺的性質の中比較的區別性の

精細なるもの程次第に他を、變化の因果的相應の上に、代理(意味的に指示)する役割をつとめ、結局他の諸感覺に屬する變化は總べて、何らかの様式に於ける所謂計器の目盛と指針との一致不一致を見るといふ視覺的體驗にまで還元されることとなる。而もその視覺的體驗も結局その直接な性質的差別性に於いてではなく或る量、即或性質的同一性の上に於いて相異なるもの、を比較的に指示すべく目盛に讀まれるところの單なる數の限定にその最後の結果をもつべきものである。かくして一方に少くも直接的には全く感覺的性質的差別からは離れる如く見える單なる數量的規定が成り立つと共に、他方に於いて諸感覺中廣義の觸覺はその生命的切實さに於いて特別な意味をもつて居り(心理學書に時折見る如く、觸覺が體の全面にひろがり耳目其他の如き特殊器官の局所的分化を缺く故をもつて、それをあたかも進化に取り殘され原理的に云つて右の意味の分化の今後に期待される感覺でもあるかの如く云ふことは、全く觸覺といふものの機能的本質を忘れた議論であらうと思はれ、——臭や味や音や光の感知と異つて、若し刺衝の如き機械的刺戟や熱やの感知が局部的に偏したとしたならば、云ふ迄もなく生命は到底保ち難いと思はれるのである)、結局は觸覺的に最後の確かめを得べきものとしての形や大きさ等の空間的規定(それは又、所謂共通感覺的に諸感覺種にまたがり關係的に公共性をもちうる——公表し外化しうる——意味の客觀性に於いて、結局主觀的内在性を脱し得ぬ項的な個々の感覺的性質からは所謂「第一性質」として一應明確に區別され得るものである)並びに重さ(乃至運動的變化への抵抗)の實際的優位があり、その重さや抵抗さへ結局は或種の空間的變位に關する比較的な規定に翻譯せられつつ、本來異質的に非可逆的な時間性の反省作用的等質性を介する量化乃至空間化があつて、茲に大いさや形に就いて或限定をもつ物(質量)の空間的時間に於ける位置の變化といふ、數量的に著しく等質化した所謂

力學的世界なるものが考へられて來ることとなる。そこには要するに感覺的性質の直接的多様が絶えずより少數の特定性質によつて（相應的變化の上に）代理され、結局時間空間質量といふ如き數量的等質態にまで還元されてくるのであつて、この事が即ち物理學的進行手續としての所謂「感覺の消去」なるものの實相に外ならぬのである。而もそのやうにして既に色無く音無く熱無く香無き單なる時空的規定といふものさへも遂には、既に見られた如く所謂微視的世界に關して次第に脱却せられつつ、かくて愈々直接の經驗的具體性を離れた純なる數學形式といふ如きものにも歸着してゆかうとする。所謂感覺消去の傾向もここに至つて極まるといふべきなのであるが、併し云ふ迄も無いことながら、そのやうな言葉から決して誤解されてならぬことは、上來その所謂消去の具體的な手續を見て來て解るやうに、それはあくまでも感覺（の相關的變化）を基礎とし、それを唯漸次より共通的な質によつて代理せしめつつ遂にはその關係を専ら記號的に象徴するまでに至るのであつて、決して感覺からの絶縁を意味するのではない、原理的にあり得ない、のであるといふ明白な事實である。感覺と眞に關係が断たれる所には或は數學は成り立ち得ても物理學は成り立つことはできない。物理學はたとひいかに無形的非存在的に抽象化せられたその表示様式に於いてと雖も、結局は常に何らか直接體驗の感覺的性質にまで、その關係的な意味的指示を伸ばし届かせてゐるのでなければならぬ。感覺的に貧寒を極めてゆくとみえる物理學的實在は實は感覺的性質に對する代表性を高め、それへの關係の間接性を増して行つてゐるのであるに過ぎない。いかに抽象的な物理學的概念も詮じ詰めれば畢竟實驗觀測の時間的性質的體驗界から生ひ立つて居り、いかに高く飛翔する如く見えても結局足の落着く所はまた右の基地以外には無いのであつて、そのいはば母胎的な基地にのみ絶えず生命を汲み、又畢竟そこへのみ絶えず（説明的に）その貢獻を歸

着せしめてゐる——つまりそこに自己をその豫言性に於いて験し試みてゐるものなのである（それは或場合極めて高度の間接性を以つてであり又必ずしも常に一義的な規定性に於いてではないが）。

物理學的實在と感覺的性質との關係を以上の如く見てくる時、そこには質を云へば既に所謂物と心との關係のいかなるものであるかも暗に含まれてゐると云つてよいのであるが、我々はそれを一層具體的に明らかにするために、通常所謂物界と心界との交渉がそこに成り立つと考へられてゐるところの、我々の身體といふものから先づ仔細に考へ直してみなければならぬ。

既に述べられた意味に於いてひとしく外界的な無数の個々物の中には、視覺的乃至（外部）觸覺的に經驗せられるそのものの運動に必ず所謂運動感覺なる種類の性質の同時存在が體驗せられ、且そのものに觸れ衝き乃至動かす時そこに觸れ衝き乃至動かす感じ（としての或る——即ちその輪廓が豫め想像的に見透されてゐる意味に於いて所謂能動性の意識がそこに成り立つところの——運動感覺的並びに觸覺的性質）の外に、必ず觸れられ衝かれ動かされる感じを伴ひ（そこには廣義の觸覺的性質の出現がいれば唐突であり、その端的な現實性が上と反對に却つて意識を先導する意味に於いて、所謂受動の感が成り立つ）、その意味に於いて、一般にそのものに關する廣義の觸覺的經驗が他の物に關する場合と異り必ず二重になつてゐる點で特異なものがあるが、それが即ち「私の身體」である。

「私の身體」は、そこに何らか他の物が位置的に合致しようとする時（この種の事柄の具體的意味、即ち性質的時間的內容、に關しては既に述べられた）必ず或觸の感覺的性質が、所謂受動性の意識なる一種の感情的性質を何らかの程度に帯びつつ、出現する如きもの（皮膚）、を以て蔽はれた（爾餘の外界との境とする）、可視的且可觸的なる一箇の

物であり、その外に、既に述べられた如くして一般の外界物が、運動感覺的性質を介して意味的に（可能的な行動的實現を指示しつつ）夫々遠近の配置を得、反面に、そのやうにして外界性の原理たる運動感覺的性質そのものは、所謂内部觸覺の名の示す如くその内部に、或位置的限定を得ることとなる（筋肉、腱、關節等）——即ち位置的限定なるものは元來運動感覺的性質の、他性質との時間的相關に於ける、或法則性に於いて成り立つものでありながら、一旦それが組織的に空間として成立し、特に、優れて包容的統一的、従つて行動を導く見通しとして優れて有效、な視覺的形式に於いてその想像的具體化を得るに至つては、そこに一種の自主性といふべきものを生じ、今度は譲つて逆（個々の運動感覺的性質に就き、その出現と恒常的に結びつく或視觸の經驗の（特定身體部分に關する動作としての）既得の位置附けを介して、却つてその定位に或指示を與へるに至る——云ひ換へれば運動感覺に就いては、（常識的な立場で所謂刺戟源泉と感交面とが不可分であつて）他の「外的」性質の場合の如く感覺せられるものへ（嚴密には感覺強度の増す方向へ）感覺器官（云ひ換へれば感覺増強に關しその近接が特に有效な身體部分）をもつて即いたり離れたりすることによる遠近の配置といふことが不可能であり、従つて右の如く既に別の方面から（やはりそれ自身——原理的に云つて——運動感覺を介して）空間性を得てゐるところの外的な視觸の内容との恒常的な關係に基き、直接にはそのやうにして専ら我が身體の外發的な運動様態の函數である意味に於いて、その運動する當該身體部分に即して定位が行はれる外ないのであり、ここに運動感覺の定位に就いては、一旦云はば蓄へ整へられたその相關の組織から改めて自身の定位を得てくる意味に於いて一種の循環があると云へるのであるが、その事は元來空間の本質が徹頭徹尾關係的なものであり相對的なものである（云ひ換へればつまり循環的なものである）ことを考へれば別に不

都合は無いと思はれるのである。——尙ここで序に一言して置くならば、右の如く性質の位置付けを云ひ外界性の成立を直接の性質的・時間的・體驗から説かうとするに就いては、例へばベルグソンの「物質と記憶」に於ける如き異論が思ひ浮かぶのであるけれども、そこに云はれてゐる如く——元來空間性を含まぬものとしての感覺的性質がいかにして空間性を得てくるかは到底説明不可能であつて、「純粹（記憶を含まぬ）知覺」内容は實はそれ自身すでに或（「不可分的」）延長を、所謂「運動性」と即しつつ直ちに物質とも連なつて——即ちそのやうな延長性を感覺的に純質化するのが「記憶」の云はば瞬間集約、その緊張、であるといふのである——含んでゐるのであり、所謂「イマーシュ」は常識的に知覺せられる如くそのまま本來外界的に存在するものなのである、といふ如き考へに對しては——先づ、元來延長や位置付けの如きをそれらとしてはまだ含むことのない感覺的性質（普通視觸に直接的と考へられてゐる擴がりや「局所」）性の如きは實は、嚴密に感覺そのものとしては、單に、それらをやがて可能的・動作的に意味すべき所謂「微驗乃至記號」としての、差當り無意味な或獨自の性質的存在といふべきもの以外の何ものでもない」と考へられる（が、動作的に運動感覺的性質との時間的相關を介して、いかにして外界性を意味的に得てくるものであるかに就いては既に上の章に考察せられた通りなのであり（幼児や手術せられた生盲に關する先天論者の實驗は、最も有利な場合とても高々個體的な、即ち種族としての經驗的獲得を拒まない限りの所謂生得性を云ふに過ぎず、認識論的に見て意味的成立が結局右の如く考へられなければならないといふ原理的な所謂「先驗的」事情といふべきものを脅しうるものでは到底ない」と考へられるのである）、さういふ説明乃至導來の不可能を考へるのは畢竟空間をあくまで存在的に見ようとするからであることもその際既に述べた所である（嚴密に云つて勝義に存在的なものは性質的・自己露呈的であり意味的潜在

的に關係を含むことがない、而も空間の本質は正にそのやうな意味的な關係性にある。そのやうな意味の附着する存在の基底——それは實は空間ではなくて空間的にある何らかのものに過ぎない——と意味そのものとを明確に分別しない所に動、もすれば全體として専ら存在的に見られようとする常識的乃至經驗心理學的な——所謂形態心理學の如きも勿論例外ではない——空間觀念が成り立つと考へられるのであつて、哲學的批判は決してそれをそのまま受け入れることは出来ないのである——哲學は、少くも差當り、その意味の自然主義とは兩立しない、却つて一般に自然態に對して起るのが哲學的反省なのであり、それは常に自然態をその一段奥から、つまり所謂先驗論的に、説明する——當然性に於いて自覺する——ものでなければならぬ。尙物の色や抵抗の如き知覺内容はそのまま外界的に存在するといふことに就いても、そのやうに云ふことは一應正當であるには相違ないとしても、論者は一先づその自然的に常識的な言葉の内容をば、その眞の具體的意味にまで追究し還元して見る必要があるであらうと思はれる（それは結局或行動に關する性質的時間的體驗といふものに歸着する外ないものであり、議論を眞に決着せしめるにこれより外に途はない）。さうすればそこに所謂外界性の既に述べられた如き「意味的」本質も明らかとなり、上來の我々の立場の必至な所以も理解され、その事はやがて、性質と運動とを直接に即せしめる如き論者の行論上の無理に就いてもおのづから或解決をもたらしめてくることと思はれるのである（この事に就いては尙後に）。

運動感覺的性質は右の如くして私の身體の外的に見られ觸れられる運動と必ず伴ふが、必ずしも身體の外的な運動とでなく、その單なる存在と既に不可分な感覺的性質として所謂有機感覺なるものがあり、他の感覺的諸性質の斷續出沒を通じて比較的恒常的で、且その存在並びに變様が身體外の事物や身體の外發運動とは直接の相應性をもた



す、結局唯我が身體内部の、種々の間接的方法で外部から探索推定される、變化とのみ恒常的に結びついて居り、動作の如き顯著な外的徴表と照應的に考へる便法を缺く意味に於いて、その明確な定位が運動感覺の場合に比して當然一層困難ではあるが、ともかくも身體内部に一層深く或は廣く或範圍の位置的限定を得ることとなる（内臟諸器官乃至諸組織）。所謂感情なる一種の直覺的性質、或はそのやうに「意識内容」化せられる限りの感情、の定位も亦これに準ずる。——考へ來つて解るやうに、一般に性質的存在を空間的に定位するといふことは、その存在並びに變様と時間的に直接相應する如き他の性質的體驗（結局或動作従つて或運動感覺的性質をその必須の要素とする）を、その相應的結合の法則的恒常性に於いて意味的に指示しつつ、それと結びつけて意識するといふことに外ならぬ。或感覺的性質が身體の外に或は内に或位置を占めるといふことは、常識的な立場で云つて所謂刺戟の源泉がそこにあるといふこと、つまり現象論的に云つて、そこへ感覺器官を近づけると云ふ、或は身體内部の場合そこを動かすとか押してみることかと云ふ、或性質的時間的體驗と共にその性質の廣義の強度が増すといふこと、その法則的豫期であるのであつて、決して感覺的性質そのものが「外に」或は「内に」あるといふことではない——そのやうに云ふことは凡そ意味を成さないのである。かくて空間性はあくまでも動作的に實現せらるべき或意味なのであつて、決して感覺的性質とそのまま即する存在的内容ではないと考へられる。勿論通常の經驗的意識にとつては意味的契機に關する如上の分析や結合の意識は無く、その自然的な渾然態に於いて動、もすれば空間意識を直ちに存在的に直接的と見ようとする傾向も生するのであるが（空間に關する古來の「難問」はそれに伴ふ）、それはあくまでも無批判的な自然態であることに間違ひは無いのである（例へばジェイムズがその「心理學」第廿一章に「大いさ」が感覺に原本的なことを云ひ、その實

證として雷鳴が石筆の軋りよりも大きく思はれ、又湯に入つた感じが肌を針で突いた感じよりも大きく思はれる等之に類する幾多の例を擧げる時、同じ章に引用してあるヘリングの、赤熱せる錢や火焰は *rauhhaft* に見えるといふ考へと同じく、やはりその意味に於ける一種の云はば認識論的自然主義がそこに支配して居るのであつて——因みに形態心理學の「因果」觀の如きにもそれがあり、ヒュームの反省は實は却つて所謂 *Finalität* といふ如き自然態に「對して」起つたものなのであると思はれる——畢竟眞の感覺的性質そのものと外的原因の聯想乃至類推や可能的體驗の豫期の如き知覺的解釋の意味含蓄の一面とが全く分別されて居らぬと考へられるのである。眞に感覺そのものに原的な所謂大いさとしては畢竟單に所謂内包量的な意味のそれあるのみであらうことに就いては既に上に述べたのであるが、尙念の爲それに附け加へて置くならば、知覺的解釋はそのまま直ちに感覺を感覺的に變様するものに外ならぬといふ考へ——畢竟所謂「形態性質」の考へであり、内容的には乃至或程度まで命名的にも(第廿章)ジェイムズ自身既に極めて明瞭に強調してゐる事柄である——に對しては、元來意味はその超出的な志向に即してのみ、超出せられる當のものの存在性に對し眞に意味として存立するのであつて、それが反省的にいにはば虚脱せしめられ内在化せられる限りに於いては、當然右の存在的基底そのものの上に變樣的に反映しつつ自身やはり存在化する外ないけれども、その際は又却つてそのやうな存在的包括態そのものが更に自身の外に向つて、畢竟「形態性質」そのものの動的一面に外ならぬとも見られるところの何らかの意味的傾動をもつてゐる筈であり——この關係は原理的に云つて幾重にも轉倒するものであつて、形態心理學が所謂「形態」の概念の存在性に引き摺られ、右の意味に於ける高次の、即ち所謂形態なるものを更に超え包むところの、意味的乃至「機能」的一面を少くも或場合忘れ勝ちであつたことに就いては、既に例

へば増田惟茂「心理學研究法」(三〇—三四、五八頁等)の指摘があるのであるが、意味が形態性的存在化乃至内在化と反對に右の如き一方的開放態に於いてあるのが、此著者の所謂「精神機能」に相當し、感覺的「質料」から區別される「形態性」と形態的「意識内容」から區別される「精神機能」とは實は、自然的にこそ一應此著者のなす如き段階的な區別はあれ、原理的に云つて互に相對的に相融通するものであらうと思はれ、例へば視覺的な所謂「地」と「形」の實驗の如きに就いても、そこに所謂「見える」と云はれることの中には、感覺的純性質態の一面と即してすでに或、外的並びに內的な觸覺的性質への、意味的指示(初發的實際傾動乃至想像的遂行)の一面が暗に働いてゐるのを内省的に指摘し得る、即ちこの意味作用を離れてはかの「見える」も實はその通りには成り立たないといふ事情にある、と思ふのである、つまり一般に我々が形を「見る」のは實は「線は引きつつ」乃至「觸れつつ」見てゐるのである(その意味に於いては凡そ意識するといふことが直ちに或動作と切り離せないといふことが云へるのであつて、所謂意識と意志作用とは元來一者の相即的の二面なのである)所謂形態はそのやうな意味的形成が内在化的に省みられてのみ何らかの程度の全體性に於いて成り立つのであつて、形成過程に即してはまだ一方が存在的には破れてゐる、完結してゐないと云はねばならない、唯視覺的圖形の經驗の如きに於いては意味的形成と成果とが自然的經驗的には分ち難い程、いはば「先驗的、反省を要する程、實際に直接化してゐるといふに過ぎないと思はれるのである——具體的に見られる限り、所謂形態なるものに内在化し切らぬ意味に於いて非形態的とも云ふべく、形態的な纏まりを絶えず一方へ破り出るところの、純なる意味作用の一面はあくまでも認められねばならないのであつて、現に或形態論者の所謂 Gestaltion なるものは實は畢竟それである或は少くもそれを含むと考へられ、やがて何らかの「形態」を成すべくも現にその傾動自身に嚴密

に即しては、まだその所謂「力学平衡」的内在(完結)態に到らぬ過渡(云ひ換へれば心的存在化的に省みられるに先立つ「志向」そのもの)である限りに於いて、つまり云はば非形態的に一方へ破れてゐると云はねばならぬ或ものと云ふ外なく——或はアミーバ的動搖もそれ自身「形態」を成してゐると云ふかも知れぬが、それは事態の外的(環境的)契機を無視してゐるのであつて、事態を眞に具體的全體的に見るべく存在的な條件を包括してゆくことには實を云へば際限が無いのであり、法則科學はそれを或程度までで止めるといふ抽象性を免れないのであるが、そのやうにしてもかくも一應全體的に纏められる限りの存在的包括態に對しては、その傾動し行く先は結局非存在的つまり意味的にそれを超えてゐると考へられなければならぬのである——それは實を云へば畢竟心理性に對する論理性の一面、云ひ換へれば「形態」的に生理的物的事象の對應が考へられる如き(反省的理解的)決定性の一面に拮抗する(評價的實踐的)自由性の一面として到底消去し切れないものなのであつて、自然的にこそ現在所謂意味的「文脈」と要素と不可分に、全體として一應全く内在化してゐる如き形態的統一に就いても、それを一先づその所謂「先驗的」な成立過程にまで、或場合方便的に想像的抽象性を厭はず還元しつつ——何故ならば、形態性が成素と同格的に、或は要素的分離は形態的全體からのみなされる意味に於いてはそれに優つてさへ、原本的といふことは、單に經驗的に事態の自然成果的現在に即してのみ(例へば初生兒の意識の如きも既に生物的種族的成果と見ることができると)全く確實に云ひ得られることであるに過ぎず、そのやうな經驗的自然態を單に記述するに止らず更にそれを説明するためには結局その自然態を所謂「根源」へ向つて超え出なければならぬ、即ちその限り經驗的に直接的な現實から離れることをも敢てしなければならぬ、のは當然であるからである——その中に眞に原本的に無意味な純性質と、元來意味的に成り立ちつつも

存在的に直接化した性質的契機とを、自然的にはいかに困難なるにせよ畢竟認識論的に云つて必ず一應明確に分別しなければならぬ（所謂形態性の或ものが云はば何らか物的基礎の状態を暗示する底の原的な積極性をもつことは否定できない、何らかの原的措定乃至傾動なしには經驗的成立といふこともあり得ないことは明白である）、さうしなければ所謂難問は解けぬのであり、從來形態性に對して要素を先きにしうとしてゐた所謂構成的立場なるものも、實は暗にこの事態の豫感に沿うてゐたものと考へられる限りに於いては、あくまでも正常な自身の存立理由をもつてゐた、或は現にもつてゐると云つてよいのであると思はれる、とかやうに答へる外ないと思はれる。

さて性質的に存在的なるものとしての感覺的並びにそれに準じて感情的なる生内容は、上述の如くして夫々我が身體の内外に或配置を得るが、併し生の内容は決してそのやうな反省的に對象化し得る存在態のみに盡きるのではなく、その反面にそれに即して反省そのものがさうであるやうな意味的關係的な作用乃至機能の一面を缺くことができぬ。感覺や感情に就いても、所謂内省の凝視に捉へ得るその存在的内容に對しては、どこまでも感覺する乃至情感するといふべき形式的に純なる（性質的不透明と反對な）はたらきの一面がその外に残ると考へねばならぬ（感情の場合この區別は一層困難、乃至或場合不可能といふべきであるが）。實を云へば所謂内省的凝視とは即ちそのはたらきの一面が特に強化されたものの謂に外ならぬと考へられるのである。それは感覺や感情の内容に外から加はつて来たものと云ふよりも、却つてその内容自身の要求（この場合知的自覺的）に沿ふ、その内面からの意味的進展の一面に外ならぬと考へられるのである（所謂「注意」を一種の「形態作用」に歸せしめようとする考へはその限り正當である）。云ひ換へればそれは即ちその内容自身の一種の意志實現と云つてよいのである。自己を性質的に自覺するといふこと

は、その所謂意志の單なる一方面に過ぎず、それは當に自己を目指すばかりでなく、性質的に異なる他の内容をも——或場合幾重にも——目指す（その云はば「移行（傾動）」一般の意識が作用の意識である、或は意識そのものである）。特に感情の如きにとつては、自己の性質的自覺（の強化）といふことは、寧ろ異例な云はば至められた意志であると云つてよい。云ひ換へれば感覺の意志的發展の如きも實は感情的に推移するものである（その意味に於いてあくまでも自己が自己に屈し關する——「移行」の自己（保持的）否定——といふべき方向に沿うて、結局純作用的に感覺的性質態を失ひつつ透明化してゆく、感情の成立はあると考へられる）。ともかくも生の現實は、對象的に把握される内容の外に尙、その把握そのものがさうであるやうな作用の一面をもつ。それが内容を意味的に關係させるのであつて、把握固定される内容に對しあくまでも所謂過程たることを本質とするところの意志の一面である。反省的把握に對しては、反省的把握そのものがさうであるやうに飛過的で捉へ難いが、従つてその「かくある」に就いて明確を缺くが（所謂透明性）、そのあることは疑へない。寧ろ「ある」自體であつて却つて「かくある」の基礎であるといふ外ない。それは對象的内容が感覺であるに對しては「感覺する」であり感情であるに對しては云はば「情感する」である、つまり最も形式的に云つて「意識する」乃至「思ふ」である。生の内容は具體的にこの一面を缺き得ず、この一面あるによつてはじめてそれは「我が」、従つて又「凡そ」、生に屬する。單に性質的存在と見られる限りの上來考へられてきた感覺や感情は、上述の如くして一應わが身體の内外に、上述の意味に於いて、夫々或定位を得るのであるが、そのやうな定位にはすでにそのやうに定位するはたらきの側たる廣義の「思考」そのものが、そこに尙定位せられることなく残つてゐるのであることは明白である。それは「感覺する」であり「情感する」である外に、感覺が他の感覺を意味的に指示し

つつ「知覺」となるに即しては「知覺する」であり、更には「想像する」「想起する」「推理する」であり、それらを通じて生の現在段階の超出——（自己追及的）自己否定——といふ一面から見られては「意志する」であり、最も包括的にはつまり「意識する（思ふ）」であるが（意識）にせよ「おもふ」にせよ、夫々少くも文字の上乃至言葉として、廣義の「知る（考へる）」と「欲する（慕ふ）」とを含んでゐるといふことは、最も直接なるものの自覺に於ける作用知としての根本的な二面相即性と照らし合はせて意味深く、かういふ所にも屢々謂はれる我等東洋人の綜合的直覺的な、悪く云へば分析の曖昧な、ものの感じ方が表はれてゐるとも見られるのであらうか）、感覺的乃至感情的性質の如上の定位に準じて、このもの自身の定位はいかに考へらるべきであるか。（未完）

寄贈雜誌

九月號 哲學雜誌、思想、理想、文化、丁酉倫理講演集、法學論叢、經濟論叢、法學、一橋論叢、學校教育、社會學徒、國民醫學、湖畔の聲、文化日本、全人、日本世紀、資料戰線、同致、關西大學新聞

次	目	號	前
有と知（空前）……………	文士	山田次郎	
教育の主體……………	文士	前田博	
人種、民族、國民と……………	文士	高山岩男	歴史的世界